

# 仮面づくりを通してその過程を考察する I

～レッジョ・エミリアにおける指導法の事例に学ぶ～

尾崎 春人      〇飯村 静江      中川 美樹      山本 恭章  
( 銀嶺幼稚園 )

## 1. はじめに

近年、北イタリアのレッジョ・エミリア（以下REと略す）の築き上げた幼児教育の理念と実践が注目され、そのアプローチが日本の保育界でも、様々な角度から比較検討され、日本での受け入れの可能性などが論議されている。レッジョ市民が20年以上をかけて創り上げたといわれる、地域の歴史文化や地域社会の特徴を十分に反映した環境と、指導体制を備えた幼児学校の取り組みは、ヨーロッパをはじめアメリカでも1990年を前後して注目を集め、RE展の開催や、研究者を招き、視察団を送り込むなど交流研究が盛んに行われたと聞く。1991年6月本園教職員3名がその強い興味関心と期待感をもってREを訪問し、その実情を視察している。REの二つの幼児学校のうちラ・ビレッタ幼児学校での視察報告がスライドや写真を通して行われた。その中で興味を引き驚かされたのが、あらゆる空間に所狭しと展示された幼児の絵や製作作品の数々で、まるで幼児学校全体が丸ごとアトリエのように感じられた。また、それに関わる子どもと保育者達の真剣な眼差しや、自信と満足感に満ちた表情の豊かさ、大人達の手で工夫、準備された環境の見事さである。

その日（1991年6月4日）の実践の一つとして報告された「ポピンズ」の写生とその指導法は、「描画とは真実を読み取ることであり、表現とはことばという記号に置き換える方法の一つ」だというREからのメッセージを私達日本の幼児中心の指導法に新しい風として受け止めようと思う。本稿ではその「ポピンズ」の描画指導の事例を検証する意味を含めて、幼児に「仮面」という題材を基に、描画と紙粘土により、2つの指導法の違いによって、幼児の造形表現がどのように異なるか、二種の指導過程を通して、真実を読み取るまでに対象に迫る指導法とは何かなどを考察したい。

## 2. ディアーナ校における「ポピンズ」の写生実践

(当時のアトリエリスタ ベア・ベッキのアイデアと指導案で行われたもの) の要点

### 〔第一段階〕

- a. 学校から10分程歩いた野原や麦畑に自生しているポピンズの花を子どもと一緒に摘み、持ち帰ったも

のが、色々な場所に花瓶にさし置いてある。

- b. 野外工房を大人達が作り、イーゼル、テーブル、画用紙、絵具、絵筆、色鉛筆などを用意し、ポピンズ（以下花と略す）を飾る。
  - c. 年長児数人がテーブルの上に置かれた花を、よく見たり、花びらをさわったりしながら十分観察をする。
  - d. 美術指導専門講師（以下指導者）により「描いてごらんさい」と促される。
  - e. 幼児は四つ切り大の白の画用紙に色鉛筆を使い、テーブル上で花を描く。
  - f. 指導者は子どもが描き終わったと思うと近寄って、花びらや花卉の形、茎の付き方や色の塗り方など、細かいところまで一つ一つことばで確かめさせ、見させ、花をさわらせ、時には花びらをばらばらにして、どのように花びらがついていたか、その感触はどうかなどことばで確かめさせる。また、色の塗り方の手本を示しながら、手直しをしてあげ、形や色が十分に読み取れない子どもには、子どもの視線に合わせ、繰り返しどこに着目させ、どのように子どもが理解し、表現しようとしているか一人につき2～3回の指導を繰り返す。
  - g. その後30～40分、子どもは再び描きだし、十分満足がいくまで描く。
- 〔第二段階〕

- a. 次はテーブルの背後に置かれたイーゼルに向かい、自分で捉えた花をたっぷり絵具を含ませた筆で、画面一杯に描いていく。花瓶にささった花をふりむくことはなく、自分のイメージのままに一気に描いていく。指導者は質問に答える以外は指導は行わず、子どもが花に対するイメージ、記憶が消えないうちに描きなさいという振りをしている。
- b. 色は自分でつくりながら描き、描き終わると指導者に終了を告げ、絵具、筆などを片付ける。
- c. 描き終わった作品は目的に応じて、一時又は数日展示し、誰もが見えるように展示するという。
- d. その後は描いた本人に手渡されることなく焼却されるとのこと。

## 3. ポピンズの実践及びREの着目点と特徴

以上、実践の観察報告と合わせ、「レッジョ・エミ

リアから何を学ぶか」(イリノイ大・リリアンカツ教授の日本乳幼児教育学会10回大会記念講演要旨)の中から特に造形表現活動に関する実践の特徴に着目したい。

- a. 子どもも大人も共に遊び、働き、語り、考え、物事を発見する楽しさ、求める環境が整っており、色々な仕組みについて身体的、思考的、行動的な違いと共通点をお互いが知ろうとしている。
- b. 大人は、子どもは本来、描きたい、知りたい、理解したいという知的好奇心や欲求をもっていることを踏まえた上で、ことばを使い周囲の人々との意思、感情を伝え合い、物事を理解していくことを援助していく。それは単に意味や名称といった知識ではなく、自分の判断や行動を決する時に役立つような、自己形成に結びつく。
- c. 指導者は個々の技能への示唆と素材へのアプローチなど基本方針としてもち、一人一人に合った集中指導の一貫として行っている。
- d. 描画や造形など集中力をもち、丁寧に行う。大人も子どもも何かが大切かを感じ取っていく。
- e. 大人が子どものアイディアや表現に耳を傾け、意思の疎通を図ったとき、濃厚で複合的な結果が得られる。
- f. 新しく発見したことを明確に、深く、強くもう一度チャレンジしようという気持ちを起こさせる。
- g. 時間は急がされることなく、十分に与えられる。

#### 4. 「仮面」を取り上げた経緯とREの接点

- a. G園では昨年行われたシドニーオリンピック2000の開会式を意識し、運動会で各クラスがいろいろな国を象徴する仮面をつけてパレードを行った。仮面とは文字通りもう一つの顔であり、仮面をつけることで日常の自己を変える、変身できるもの、自分の能力を超えるものを引き出す、また、人格を消すという効果をもっている。親子でパレードに使う仮面や衣装を相談し、製作し、表現するという経験を共にした。
- b. 11月の造形活動の日には、各クラスが取り上げた国の仮面を、国立民族博物館で調べた民族の仮面、ビデオや仮面の本などを基に視聴した後、年少は紙袋、年中は紙粘土、年長は陶芸用粘土を用いて仮面づくりを行った。また、ミニ博物館には珍しい民族仮面の数々を展示し、関心を高めてきた。
- c. 今回取り上げた仮面は、造形の日クラスのシンボルとなり、2月3日節分の日に行われるファンタジックプレーにも繋がるようなものを造る意図で、ヨーロッパを担当するクラスの子ども達が講談社出版の「仮面」(Masks of the world)の本の中からル

ーマニアの北東部、モルダビア地方の越年祭に古くから使われている仮面を選んだものである。この仮面の特徴は、粘土で形づくられた顔に、朱色の布を縫って貼り付けた目と大きな口、口の中に白い豆と、ストローのようなものを切って差し込んだ歯、そして真ん中に大きな鼻、髪の毛と眉毛は馬の尻尾のようなもので出来ており、見れば見るほど仮面の不思議な世界に誘われるようなものである。

- d. この仮面の謂れを聞き、仮面の印象や部分的な特徴の面白さをなどを話し合った後、子ども達はこれを魔女と名づけ、なるべく本の仮面に近づける材料を考え集め、製作に取り組んだ。顔の部分を園芸材料で、頭の後ろの部分はこげ茶の不織布を使い、目と口は着物の生地、鼻はグレイのスポンジ、眉毛は黒と茶の細かいチェック模様の布を三つ編みにしたもの、口の中にはダンボールの切れ端、パッキング材などを用い、髪の毛は毛糸と、とうもろこしの葉を乾燥させたものを使い、仮面づくりに取り組んだ。
- e. 製作日数は約4日。縫う、編む、切る、貼る、結ぶ、詰めるなど手分けして作業し、これに年中、年少の子どもたちが魔女の洋服と手足を作り、造形展の当日展示された。ホールに展示後はクラスに展示し、魔女の前でいろいろなことを語りかけたり、即興の劇あそびをするなど、クラスの大事な環境構成として位置づけられた。
- f. 今回研究の被写体として、4-cで紹介した仮面(魔女)を取り上げた理由は、①既に年長児全員にとって、仮面が身近な存在であること。②描画、製作する対象として、それぞれ顔の部分がシンボリックな形として捉えやすくできていること。③手で触れたり、中に入って活動したりが容易であること。その他、ことばを使う認識の方法、表現する方法が導きやすいと考えたことである。
- g. 「ポピンズ」の描画活動の中で、特にアトリエスタと指導者の果たす役割の重要性について気づかされる。日頃の絵画指導で遠足や運動会など、楽しかった行事などの後に思い出させ、自由に描かせ、記録として残すという方法をとっていることがないだろうか。子どもは経験したり、感動したことを即、絵に表現できるわけではない。思いはあっても表現したい一本の線に頼ってしまう場合もある。そのような時に保育者が、絵画指導に対する考え方、指導の深度をきちんと定めた上で、子どもの物事の見方、ことばによる読み取り、イメージづくり、表現の技術を指導する必要性を感じる。指導者の働きかけが子どもにどのような影響を与えるか、第二報で報告したい。

以上